

(5) 【 凡 例 解 説 】

[ブ ナ ク ラ ス 域 自 然 植 生]

(1) ブナーシラキ群集

(相観)夏緑広葉樹の高木林

この群集は西日本の夏緑樹林を代表する群落であるが、長崎県では雲仙のごく限られた地点にのみ発達する。高木層にはブナ、コハウチワカエデ、ヤマボウシが生じ、低木層にはシラキ、アブラチャン、ウリノキ、ケクロモジ、草本層にはジュウモンジシダ、ウンゼンカンアオイ、アキチョウジが生育する。(点表示)

(2) コハウチワカエデーケクロモジ群落

(相観)夏緑広葉樹の高木林

長崎県下では雲仙と多良山系にのみ発達する。両山地は火山で、熔岩は十分には風化されておらず、地表にはしばしば熔岩塊が散在する。こうした立地に本群落は発達する。高木層には、コハウチワカエデまたはヤマボウシが優占する。母岩の未風化が多い立地では、これにナナカマドが加わる。低木層にはケクロモジとヤマアジサイが常在し、雲仙ではウンゼンザサが優占するところもある。組成全体はブナーシラキ群集からブナが欠けたもので、後者の未発達の夏緑樹林である。

(3) ヤマグルマーヒカゲツツジ群落

(相観)常緑広葉樹の低木群落

この群落は長崎県下では雲仙と多良山系の熔岩崖地の肩の部分に発達する。高木層の高さは10メートル以下で、ヤマグルマが常に優占し、崖地を好むナナカマド、コミネカエデを伴い、低木層にはヒカゲツツジ(常緑)が生育する。崖の表面には、ヒメスギラン、ヤマアジサイ、フクロシダ、イワイタチシダ、ウスバヘビノネゴザ、ダイモンジソウなどが生育している。(点表示)

(4) ニシキウツギ群落

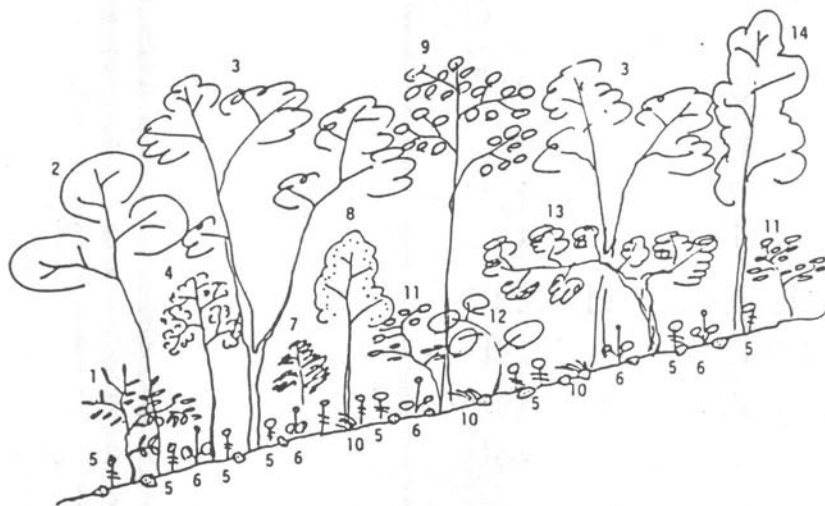


図3 コハウチワカエデ-ケトロモジ群落断面模式図

1. コバノガマズミ, 2. アオハダ, 3. コハウチワカエデ, 4. タンナサワフタギ, 5. ヤマシロギク, 6. モミジガサ, 7. イヌツゲ, 8. シキミ, 9. ヤマボウシ, 10. ツルナシオオイトスゲ, 11. ケトロモジ, 12. ハナイカダ, 13. ニシキウツギ, 14. アズキナシ



図4 ヤマグルマ-ヒカゲツツジ群落 (A) およびテンニンソウ-ハルトラノオ群落 (B) 断面模式

1. ヤグルマ, 2. ナナカマド, 3. ヒカゲツツジ, 4. サイゴクミツバツツジ, 5. ホツツジ, 6. ヒメスギラン, 7. フクロシダ, 8. イヌシダ, 9. ダイモンジソウ, 10. フクオウソウ, 11. テンニンソウ, 12. ハルトラノオ

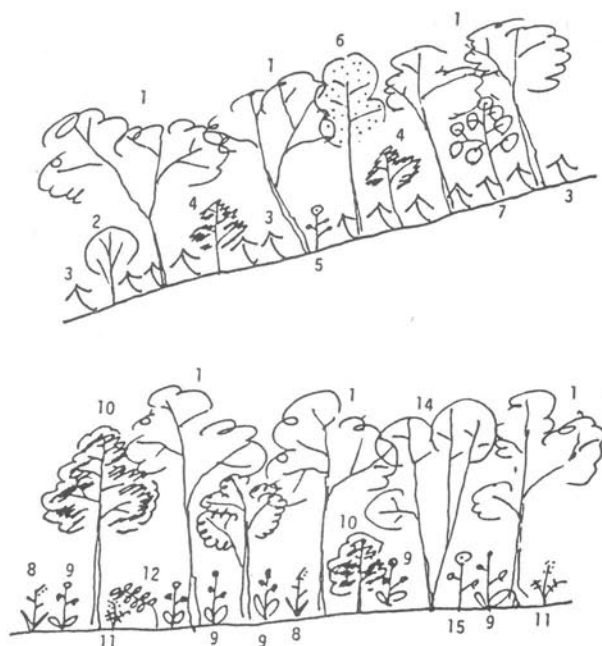


図5 ニシキウツギ群落 (A. 乾性立地, B. 湿性立地)

1. ニシキウツギ, 2. シモツケ, 3. ウンゼンザサ, 4. ミヤマキリシマ, 5. ヤマシロギク,
6. コハウチワカエデ, 7. オオコマユミ, 8. ハルトラノオ, 9. ヒカゲミツバ, 10. イヌツ
ゲ, 11. セントウソウ, 12. ヤマナルコユリ, 13. ノリウツギ, 14. アブラチャン

(相観)夏緑広葉の低木林

ニシキウツギが優占する群落は、夏緑樹林域の先駆群落である。乾性の立地では林床にはウンゼンザサが植被率百パーセントで優占する。ほかに低木層にはタンナサワフタギ、コマユミが生ずることが多く、草本層にはススキ、シモツケ、ミヤマキリシマ、ナガバモミジイチゴなど乾性耐性の植物がウンゼンザサに僅かに混生する。湿性の立地ではニシキウツギに混じってノリウツギが生育し、林床にはウンゼンザサは無いかわいても少なく、モミジガサ、ヤマシロギク、ツクシヤマアザミなどの広葉草本が優占する。

(5) ミヤマキリシマ群落

(相観)半常緑の低木群落

ミヤマキリシマは九州の火山地帯に特有のツツジ科植物である。

長崎県では雲仙だけに生育する。その優占群落は国見岳、普賢岳、九千部岳の山頂の風衝地と、海拔がやや低い尾根や斜面に発達する。前者の立地では、群落高は低くて1 m程度で、ミヤマキリシマの他にコツクバネウツギ、タンナサワフタギ、シロドウダン、イヌツゲ、シモツケ、コマユミ、ニシキウツギなどが混じる。草本層にはウンゼンザサが優占する。これに対し山頂部以外のミヤマキリシマ群落では人為的な管理も行なわれて、ミヤマキリシマ以外の低木類は少なく、草本類はススキ、ワラビ、ヤマシロギク、ノアザミ、ミツバツチグリ、キンミズヒキ、ヨモギなどが生育し、ススキ群落の組成に近くなる。植生図では両者をまとめてミヤマキリシマ群落として扱っている。

(6) ヤマボウシ群落

(相観)夏緑広葉樹の高木林または亜高木林

この群落は照葉樹林域から夏緑樹林域への移行帯に成立する。相観上ではコハウチワカエデ・ケクロモジ群落に似ている。また組成上ではアカマツ・ミヤマキリシマ群集に近い。両者の特色を兼ね備えた中間的な群落であり、その発達領域も両者の中間にある。また成立条件に関しても、人為的な影響を受けた林分もある。一応は自然植生のなかに入れた。長崎県では雲仙のみで認められる群落である。優占種はヤマボウシ、ほかにリョウブ、カナクギノキ、アズキナシなど落葉広葉樹を伴い、林下にはウンゼンザサ優占の場合が多い。

[ヤブツバキクラス域自然植生]

(8) モミーシキミ群集

(相観)常緑針葉樹の高木林

本群集は、高木層は15－20m、まれには25m以上に達する高木林である。林内の構成種は海拔と立地によって異なるが、シキミ、カヤ、イヌガヤ、キッコウハグマを生ずる点で共通する。海拔500－950mの山地に発達するモミーシキミ群集では、ヤブツバキ、アカガシ、サカキ、ホソバタブ、イヌガシ、カクレミノ、アオキ、ヒサカキなどの常緑木本の常在度が高く、林床にはテイカカズラ、ヤブコウジ、ベニシダ、ムベ、キズタなどの常緑植物が多い。このような組成を持つモミ林は、雲仙、多良山系、対馬に見られる。

海拔の高い雲仙のモミ林では、上記の常緑の木本類や草本類を次第に失い、コガクウツギ、ナガバモミジイチゴ、ミズキ、タンナサワフタギなどの落葉樹が多くなり、林床にもヤマシロギク、モミジガサ、ジュウモンジシダ、オオバショウマなどが出現する。しかしシキミ、カヤ、キッコウハグマを生ずる点では前者と等しい。

以上のほか、対馬上島では河岸台地にウラジログシを伴うモミーシキミ群集の残存林を見る。

(9) イスノキーウラジログシ群集

(相観)常緑広葉樹の高木林

この群集は山地の斜面上部、海拔300－600m付近に発達し、樹高15－20mに達する高木林で、高木層には通常イスノキが優占する。ホソバタブ、アオキ、ウラジログシ、ヤブツバキ、タブノキ、ヤブニケイ、スダシイ、ヒサカキ、クロキ、カクレミノ、カゴノキ、モッコクなど多くの常緑木本を生じ、林床にはベニシダ、ヤブラン、ビナンカズラ、ムベ、テイカカズラ、キズタ、ナガバジャノヒゲなど常緑の植物が占める。組成上はスダシイ群落にもアカガシ群落にも共通する植物が多いが、ウラジログシ、バリバリノキ、ホソバタブの組み合わせによって他の常緑高木群落から区別される。



図7 山地自然林の分布

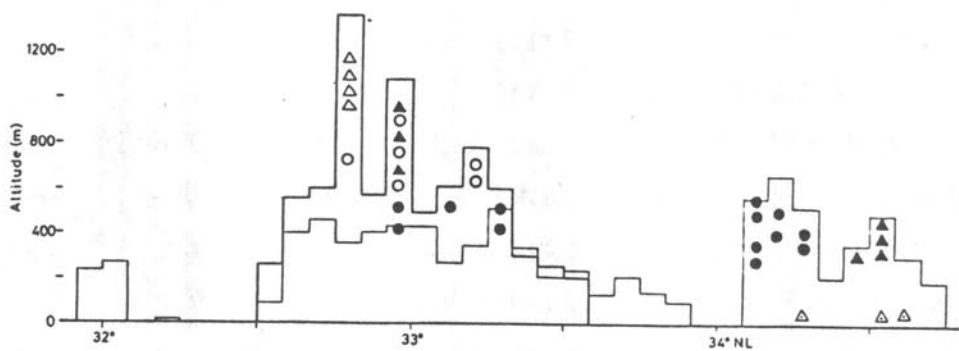


図8 山地自然林の分布断面模式
 (群落の記号は前図に同じ)

(10) アカガシーミヤマシキミ群集

(相観)常緑広葉の高木林または亜高木林

この群集は常緑広葉樹林域の上部、雲霧帯に発達する。その下限は九州本土の県下では海拔450m、対馬では350mである。樹高は風の当たり具合によって異なり、高い群落では20m、尾根筋の風衝地では10m以下となる。高木層には常にアカガシが優占し、低木層または草本層にはミヤマシキミが生育する。その他、イヌガシ、ネズミモチ、アオキ、ヒサカキ、ムベ、ヤブコウジ、ベニシダなどの常緑植物の常在度が高い。下限に近い林分ではスダシイが混成する。また雲霧帯にあたるため高い空中湿度を反映して、着生のラン科植物、シダ類、コケ類が多い。林床にはアカガシの厚い落ち葉が敷き詰めて、草本層は比較的疎開する。

(11) ケヤキ群落

(相観)夏緑広葉樹の高木林

照葉樹林域の溪谷斜面に発達する。ケヤキのほかに、イロハモミジ、ムクノキ、ハナイカダ、ウリノキなどの落葉木本を伴う。他にホソバタブ、アオキ、ヤブツバキ、ネズミモチ、イヌガシなどの常緑木本植物が生育する。林床にはジュウモンジシダの生育が特徴的である。雲仙の山麓部と対馬に知られるが、発達面積は小さい。

(点表示)



図9 ケヤキ群落断面模式

1. ケヤキ, 2. イロハモミジ, 3. イタヤカエデ, 4. ホソバタブ, 5. ヤブツバキ, 6. アオキ, 7. ホソバカナワラビ, 8. ベニシダ, 9. ジュウモンジシダ

(14) スダシイーヤブコウジ群集

(相観)常緑広葉樹の高木林

この群集は、高木層15-20mに達する森林群落である。立地はスダシイ優占群落のうちでは比較的乾性で、林床には草本は少なく、アリドウシとヤブコウジが生育する例が多い。以下に述べる他の常緑の高木群集の標徴種を欠いていて、組成上の特色のすくない群集である。

(15) スダシイーミミズバイ群集

(相観)常緑広葉樹の高木林

この群集は壱岐以南の内陸の海拔400m以下の丘陵地の照葉樹林である。高木層は15mに達し、スダシイまたはコジイが優占する。低木層にはミミズバイ、ヤマヒハツ、クロバイ、ヤマビワ、クチナシ、ハクサンボク、コバンモチが特徴的に出現する。ほかにヒサカキ、ネズミモチ、ヤブツバキ、タブノキ、ヤブニッケイ、モチノキ、クロキ、カクレミノなど多くの常緑木本が生育する。林床にオオカゲマ、ベニシダ、ホソバカナワラビ(湿性立地では)などの常緑シダ類の生育も特色である。丘陵地の大部分がこの群集の発達領域と考えられるが、その立地は現在では畑地や果樹園に変わっている。

(16) スダシイーホソバカナワラビ群集

(相観)常緑広葉樹の高木林

この群集は長崎県下では対馬に分布する。その立地は壱岐以南のタブームサシアブミ群集と同じく、低い海拔地の平野や開けた谷間の適湿潤地で、高木層は20mに達し、スダシイが優占する。相観も両者は酷似する。組成はタブームサシアブミ群集の標徴種であるムサシアブミ、オオイワヒトデ、アオノクマタケラン、フウトウカズラ、ホルトノキを欠き、ノシランは稀にしか出現せず、林床にはホソバカナワラビまたはコバノカナワラビが優占する。いわばスダシイーホソバカナワラビ群落はタブームサシアブミ群集の標徴種が失われて単純化した群落である。



図10 スダシイ-ミミズバイ群集断面模式

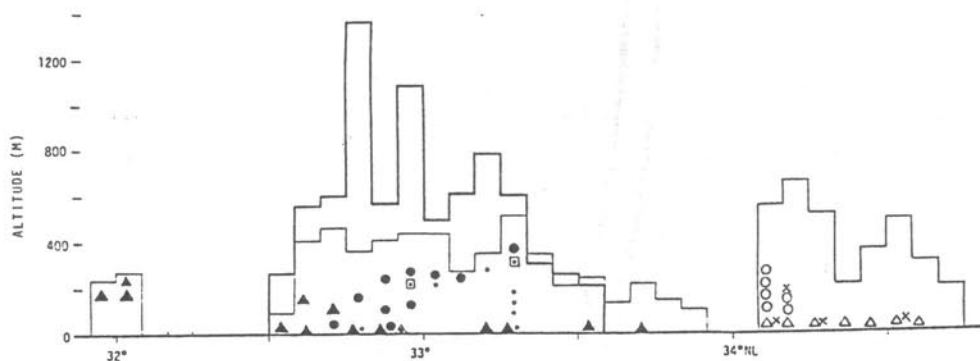


図11 低地・丘陵地自然林の長崎県内における分布 (図2-1参照)

(▲) タブームサンアブミ群集, (●) スダシイ-ミミズバイ群集, (・) スダシイ-クチナシ群落, (◻) スダシイ-イスノキ群落, (△) スダシイ-ホソバカナワラビ群集, (○) イスノキ-ウラジロガシ群集, (×) スダシイ-ヤブコウジ群集

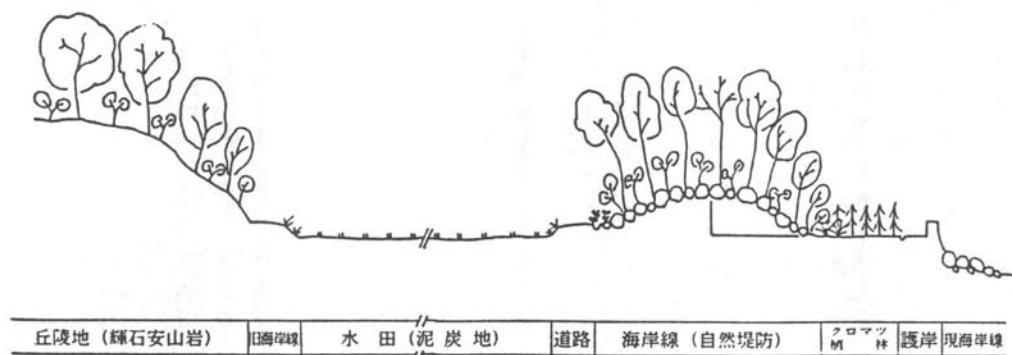


図 1 2 唐比海岸 (南～北) 断面図

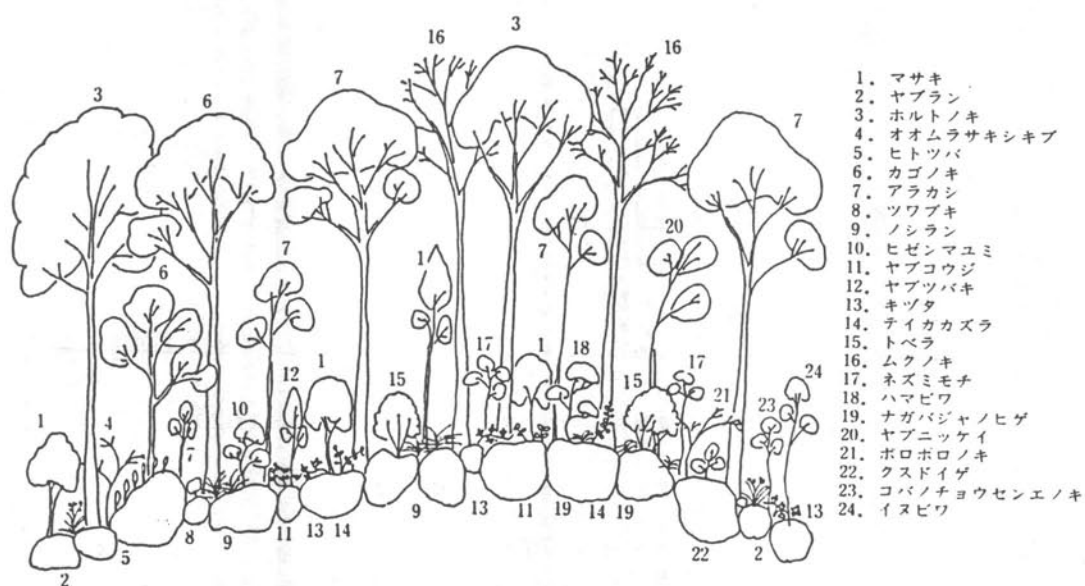


図 1 3 ホルトノキ群落断面模式図

(17) タブームサシアブミ群集

(相観)常緑広葉樹の高木林

この群集は壱岐以南の低海拔地の照葉樹林で、もっともよく発達した群落では樹高20mに及ぶ。低平あるいは緩やかな傾斜地に発達する群落であるから、現在では神社林に残存する小林分をみるに過ぎない。高木層の優占種はスダシイまたはタブノキで、しばしばホルトノキが混じる。林床には陰湿地性のオオイワヒトデ、コバノカナワラビ、ホソバカナワラビ、カツモウイノデなど常緑のシダ類、アオノクマタケラン、ムサシアブミ、フウトウカズラ、ノシランなどを生ずる。これらの標徴種がすべて揃っているのは県南部の暖地の林分で、北に行くに従って次第にそれらを失って行く。長崎県下では壱岐まで分布するが、そこでは標徴種の殆どを失い、スダシイーホソバカナワラビ群集への移行型を示す。タブームサシアブミ群集は、県下では対馬を除く地方の平野部や開けた谷間の原植生であったと見なされる。

(77)ホルトノキ群落

(相観)常緑広葉樹の高木林

この群落は島原半島の海岸低地のれき堆積地に見る高木林である。残存林は少なく、二個所に残っているに過ぎない。高木層はホルトノキ、アラカシ、タブ、ヤブニッケイ、ムクノキが形成し、林床にはフウトウカズラ、ヤブラン、ノシラン、ビナンカズラなど生育する。タブームサシアブミ群集の一型と考えられるが、立地はれきを含む堆積地で特色があり、別に凡例を設けて図示した。(点表示)

(20) マサキートベラ群集

(相観)常緑広葉樹の低木林

この群集は海岸の岩角地や風当たりの強い浅土地に成立する。群落高は1-2mで、強い風の影響を受けて群落表面はしばしば刈り込まれたような外見を呈する。優占種はハマヒサカキ、マルバシャリンバイ、トベラ、マルバグミのいずれかである。つぎに述べるハマビワ-オニヤブソテツ群集の単純化したもので、ときにクロマツ

が生育することもある。

(21) ハマビワ-オニヤブソテツ群集

(相観)常緑広葉樹の亜高木群落または低木群落

この群集は前群集と同じく、海に面した斜面に発達する。前者とくらべて立地条件は恵まれていて、群落高は3-6mと高い。最上層の優占種はハマビワ、トベラ、マサキ、マルバグミのいずれかである。土壌の浅い急傾斜地ではつる植物、ノブドウ、アオツツラフジ、クズ、カエデドコロ、ツルウメモドキや、落葉樹エノキ、アカメガシワ、ヌルデ、ヤマグワが混生することが多い。傾斜がゆるく土壌が深くなると、対馬ではスダシイーホソバカナワラビ群集に、壱岐以南ではタブームサシアブミ群集に近付く。長崎県下の海岸斜面に最も広く分布するのが本群集である。

(22) アカマツ-ミヤマキリシマ群集、アカマツ群落

(相観)常緑の針葉樹林

この群落は九州の火山地帯(霧島山系)から最初に報告された。その特色は火山地帯にあり、低木層には全体的に落葉木本がおおく、かつ半常緑のミヤマキリシマが常在する点にある。長崎県下では雲仙にのみ発達する。高木層にはアカマツまたはカナクギノキが優占し、低木層にはミヤマキリシマのほかにイヌツゲ、(以下落葉低木)コバノガマズミ、コガクウツギ、ネジキ、タンナサワフタギ生育する。雲仙の硫気孔周辺(通称、地獄地帯)ではネジキ、ナツハゼ、シャシャンボ、シロドウダンなどツツジ科植物が多くなり、硫気に耐性のない落葉低木は少なくなる。

(23) クロマツ群落

砂丘上部の安定帯に成立するクロマツ群落は、クロマツの補植や人の立ち入りのために、真に自然状態の群落をみることはできない。島原半島南部の加津佐町野田浜で見られる。

(25) イワシデ群落

(相観)落葉広葉樹の亜高木林

この群落は凝灰角れき岩の岩角地の上に成立する特殊な植物群落

である。樹高は最大で8m、普通は2-6mである。イワシデをはじめ植物は岩の割れ目や岩に薄く乗っている土壤に根をおろす。木本はイワシデの他には、マユミ、マルバアオダモ、キハギ、イワガサまたはイブキシモツケ、クスドイゲの常在度の高い出現が特徴的である。また草本類も岩上生のイワヒバ、ツシママンネグサあるいはナガサキマンネグサ、ダンギク、アレノノギクなど、特徴的な種類がある。長崎県下では、対馬の白岳、平戸の白岳、つぶて岩、佐志岳、志々岐岳、島原半島南端の岩戸山に見る。対馬白岳は石英斑岩、他は角れき岩である。(点表示)

(26) アキニレ群落

(相観)夏緑広葉樹の高木林

河辺林の一種で、対馬に一例のみ見出だされた。高木層にはアキニレが優占し、林内にはイボタノキ、オニグルミ、ムクノキが生じている。特殊な立地と他と異なる優占種のために、新しい凡例を設けて図示した。

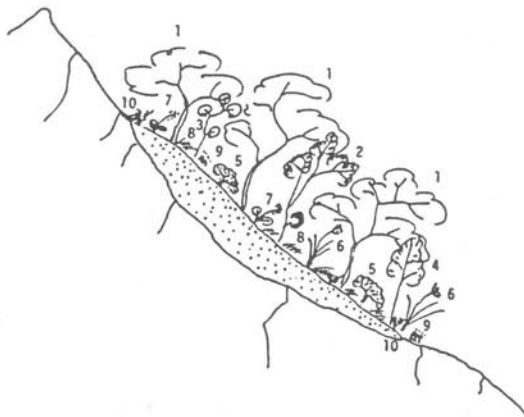


図14 イワシデ-ツシママンネグサ群集断面模式(対馬・白岳)

1. イワシデ, 2. ゲンカイツツジ, 3. コバノミツバツツジ, 4. マルバアオダモ,
5. チョウセンヤマツツジ, 6. チョウセンキスゲ, 7. シマトウヒレン, 8. イト
- スゲ, 9. ツシママンネグサ, 10. イワヒバ